



コミュニケーション能力養成を目指した総合日本語 コースの計画案：Can-doを通した初級日本語シラパ スの見直し（第1部 コミュニケーションのための 日本語教育文法）

著者	ショリナ ダリヤグル
雑誌名	日本語コミュニケーション研究論集
号	2
ページ	25-28
発行年	2012-11-30
URL	http://hdl.handle.net/2241/00145250

コミュニケーション能力養成を目指した総合日本語コースの計画案

——Can-do を通した初級日本語シラバスの見直し——

ショリナ ダリヤグル（カザフ国立大学）

要 旨

本稿はカザフ国立大学の日本語学習者がコミュニケーション能力が低いという問題点を取り上げ、総合日本語コースのシラバスの改善の試みである。JF 日本語教育スタンダードを参考にし、コミュニケーション能力養成のために、所属機関で使用されている『みんなの日本語』という教科書のより効果的な使用について考える。そして、コミュニケーション活動に基づくシラバス作成とその成果について記述する。

キーワード：コミュニケーション能力養成、JF 日本語教育スタンダード、Can-do 目標

1. カザフ国立大学の日本語の学習者

1992 年、カザフスタンのアル・ファラビ名称カザフ国立大学の東洋学部ではじめて日本語が専攻過程として教えられ始めた。2012 年度の学習者人数は 90 名で、そのうち大学院生が 14 名である。通訳や言語などの専門があるが、ほとんどの学習者がゼロから日本語を学び始める。その中、日本のポップカルチャーの普及で日本と日本語に興味を持って、日本語を勉強し始めた学習者が少なくない。これら学習者の学習目的としては「日本企業で働きたい」「日本に留学したい」という項目がもっとも多い。つまり、卒業後は日本人と直接的コミュニケーションをとりながら活躍することを、もっとも大きな目標として学習者は考えている。

カザフスタンは日本文化や日本語と接触する機会が少ない国であるが、インターネット社会になって、積極的にドラマを見たり、日本語で音楽を聞いたりする学習者も増えた。その一方で、ほとんど大学の授業のみでしか日本語を使わない学習者もいる。したがって、授業の時間は重要な役割を果たしていると思われる。また、初級レベル（1・2 年生）では積極的に日本語を勉強したいという学習者も多いが、3・4 年生になるにつれて、そのような積極的な姿が消えていく傾向が強い。

2. 初級レベルの総合日本語の授業

本章では初級レベルの 1 年生の授業を取り上げたい。日本語の授業は「総合日本語」という授業名になっており、になっていて、学習者の専門によって異なるが、週に 3・4 回程度で行われる。（1 回-50 分）1 年生では「みんなの日本語初級 I」という教科書が使用されている。

各教師はその教科書に沿って、シラバスを作成する。授業中は教科書の文型習得に焦点を当て、各課の後行われる文法テストの目的も学習した文型の理解度を測ることである。その結果、教師が教科書に頼りすぎ、コースの学習目標と終了後の到達点を意識していない状況である。

また、学習スタイルに関する 38 名の学習者のアンケート調査の結果では、「日本語の上達は教師の知識と指導能力によるものである」(70%)と「教師は勉強しなければならないものを全て教えるべき (85%)」などの答えが非常に多かった。

総合日本語の特徴をまとめると、教師が主に教科書の文法を中心に授業を行っている。そして、学習者は教師の指示に従い、教師から教科書の言語知識を受けとっている。

学習者が文法中心の授業を受け続けた結果、日本語の文法知識を持っていたとしても、運用力が低いという問題点が生じている。例えば、日本人学生との交流会などでは、学習者はされた質問に答えるのみで、自分から話しかけられる学習者があまり見られない。

また、企業実習後のアンケートでは、言語使用の問題だけではなく、報告のしかたや上司にどう話しかけるかなどが苦手だということが明らかになった。つまり、日本語の運用力が低いという問題だけではなく、日本社会・文化の体験と理解がないことも問題点として挙げられる。

このような状況から、コミュニケーション能力養成の必要性は明らかであるが、そのためにどのように授業を変えていくべきかが課題である。

3. JF 日本語教育スタンダードのコミュニケーション能力

上記の問題点を踏まえて、コミュニケーション能力養成の示唆となる「JF 日本語教育スタンダード」を参考にした。2010 年に公開された JF 日本語教育スタンダードでは、コミュニケーション能力はコミュニケーション言語能力とコミュニケーション言語活動に分けられ、この 2 つの能力を同時に育成することが重視されている。さらに、コミュニケーション能力は、言語構造能力、社会言語能力、語用能力に分けられる。また、コミュニケーション言語活動能力は、受容的活動能力・産出能力・やりとり・テキストコミュニケーション方略に分類されている。そして、学習目標は Can-do (何ができるか) で記述されていて、コミュニケーション言語能力とコミュニケーション言語活動の関連は木で表されている。さらに、日本語で専門知識を学ぶ大学生に必要な日本語能力について考える場合など、学習者に必要な具体的な言語活動とそれを支える言語能力を関連づけて学習目標を設定することができるという提案されている。

JF 日本語教育スタンダードに基づいたシラバス改善の事例もある。三矢真由美 (2009) JF「日本語教育スタンダードの試行を通した初級講座シラバスの見直し-講師の協働によるコース改善-」では、国際交流基金ケルン日本文化会館のコミュニケーション能力の教育を目標としたコースの教室活動を取り上げているが、その中で実際は言語使用が少ないという問題点が挙げられた。そこで、Can-do 目標を作成し、その Can-do 目標を「みんなの日本語初級」の課に振り分けた結果、Can-do の目標と学習項目の関連をより意識するようになったことと Can-do の目標に沿って授業を考えるようになったという実践の成果を述べている。

プーリク・イリーナ (2010) 『一般成人向けの日本語コースデザインの改善-ノボシビルスク市立「シベリア・北海道センター」の場合』はシベリア・北海道センターの日本語コースにおいて、コースデザインの改善に向けた取り組みが紹介されている。これは、学習者が実際に行うコミュニケーション活動に基づくシラバス開発を目的としたものであ

り、JF 日本語教育スタンダードの Can-do の考え方を参考にした事例である。

上記の JF スタンダードの考え方に沿うと、コミュニケーション能力養成には言語能力と言語活動の関連が重要だということが分かる。したがって、まず、日本語の授業に言語能力の文法知識だけではなく、Can-do 目標も明確にしなければならない。授業で学習した文型を使用して、自分のことや身近なことについてどのように使用できるかを意識し、学習者が能動的に積極的に日本語を使用する機会を与えなければならない。そこで、Can-do 目標を達成させるコミュニケーション活動を考え、新シラバスを作成することが必要であろう。

『みんなの日本語』は教師にとって使いやすい教科書であるが、文型が多すぎて、言語使用の活動や日本事情的な情報が少ないことが教科書の短所としてあげられる。しかし、大学のような教育機関では専門知識の重要性を否定できないため、初級レベルにおいては課題シラバスやトピックシラバスで作られた教科書よりも、『みんなの日本語』のような文型シラバスで作られた教科書を使ったほうが良いと思われる。

したがって、『みんなの日本語』はそのまま使い続けることにし、この教科書を使用しながらもよりコミュニケーション能力を身につけるために、「みんなの日本語初級 I」の各課の Can-do を提示し、その Can-do に合わせたタスク活動を作ることを計画している。

例えば、ローマ日本文化会館総合コースの初級クラスで使用されている「みんなの日本語初級 I・II」の各課は「Can-do」、「必要な言語知識」、「異文化理解」、具体的な教室活動」という項目に分かれている。その項目に沿って、コミュニケーション能力養成を配慮するシラバスが作成された。この結果から、ゼロから日本語を学習する学習者にもコミュニケーション能力を養成する授業は可能だということが分かる。

4. Can-do 目標に基づいた授業案「みんなの日本語初級 I」、1 課

Can-do 目標を通して、カザフ国立大学の初級レベルの日本語の授業を組み立て直してみると、次のような授業が考えられる。「みんなの日本語初級 I」の 1 課では、「私は学生です」のような日本語の単純な文章、「私は医者ではありません」という否定形と「・・・さんは日本人ですか」という疑問文の作り方を学ぶ。また、「 」というモデル会話は自己紹介の流れの例である。そこで、文型だけではなく、コミュニケーション養成を支える授業にするために、以下の項目を意識して、授業を行う。

Can-do：日本語で自分のことを紹介することができる

必要な言語知識：はじめまして、どうぞよろしくお願いします、人です、学生など

異文化理解：日本人が名刺交換する実際のビデオを見せる

体験的な教室活動：名刺交換

授業で、まず学習者と「日本語で自分のことを紹介することができる」の Can-do 表を見て、この授業を通して、何ができるようになるかを確認する。次に、Can-do の目標を達成するために、必要な文法と語彙を学ぶ。それから、教師はビデオを見せたり、本物の日本人の名刺を使用するなどして、日本の名刺交換の特徴について紹介する。その後、コミュニケーション活動として、名刺交換というゲームをする。学習者は自分の名刺を作って、教室を回り、学習者同士で名刺交換を行う。最後には、学習者が自分で目標の達成度を「よ

くできる・できる・あまりできない・できない」という選択肢でチェックする。

5. 新シラバスの成果

新シラバスによる総合日本語の授業は 2012 年 9 月の新学期から行われる。今までの初級レベルのシラバスを見直し、Can-do 目標に基づいたシラバスを作成する際、学習者には以下の成果が考えられる。

- ① 学習者が自分で Can-do 目標をチェックし、何ができるか、何かできないか、できるようになるためには何が必要かということが分かり、自分自身で学習をコントロールすることができるようになる。また、モチベーションが高まることも予想される。
- ② 初級レベルから、日本語でコミュニケーションを体験することで、日本語でコミュニケーションする際に感じる恐れと緊張感がなくなる。
- ③ 異文化理解が深まり、日本への理解と関心が高まる。

6. 課題

改善計画を実現する際の課題として次のことが考えられる。まず、教師が、コミュニケーション能力は言語構造能力、社会言語能力、語用能力に分けられると理解して、授業の際はそのバランスを考えることである。つまり、従来の言語構造能力重視の授業から、意識を変化させる必要である。

また、コミュニケーション言語活動能力を養成するためには、文法などの言語知識を一方向的に教師が教え、学習者は教師からの知識を受け取るだけというような、教師中心の授業パターンから、学習者が能動的に活動し、教師がその活動をコーディネートする役割を果たすという、教師の役割の変化がポイントになってくる。これは教師だけではなく学習者の意識の変化も重要になってくる。

さらに、授業が変わることで、その評価法も変える必要性が出てくる。文法中心の授業では、文法テストが授業の主な評価法であったが、新シラバスで行われる授業の場合は文法テスト以外の新評価法を考える必要がある。

参考文献

1. 国際交流基金 (2010) 『J F 日本語教育スタンダード 2010-利用者ガイドブックス』国際交流基金
2. 国際交流基金日本語国際センター 「J F 日本語教育スタンダード」
3. 三矢真由美 (2009) 「J F 日本語教育スタンダードの試行を通じた初級講座シラバスの見直し-講師の協働によるコース改善-」
4. プーリク・イリーナ (2010) 「一般成人向けの日本語コースデザインの改善-ノボシビルスク市立『シベリア・北海道センター』の場合、『日本言語文化研究会論集』第 6 号、国際交流基金日本語国際センター 政策研究大学院大学、73-92.

(ショリナ ダリヤグル、カザフ国立大学東洋学部講師、argynovna@yahoo.co.jp)